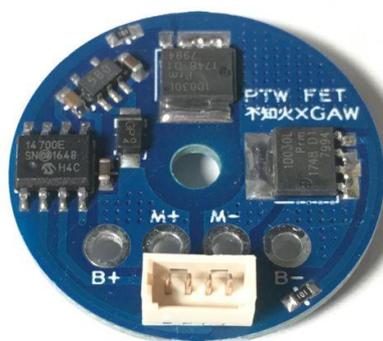


SYSTEMA純正検知基板用 円形マイクロ基板の組み立て説明です。  
内径Φ25.4mm(1インチ)のバッファチューブに対応しています。

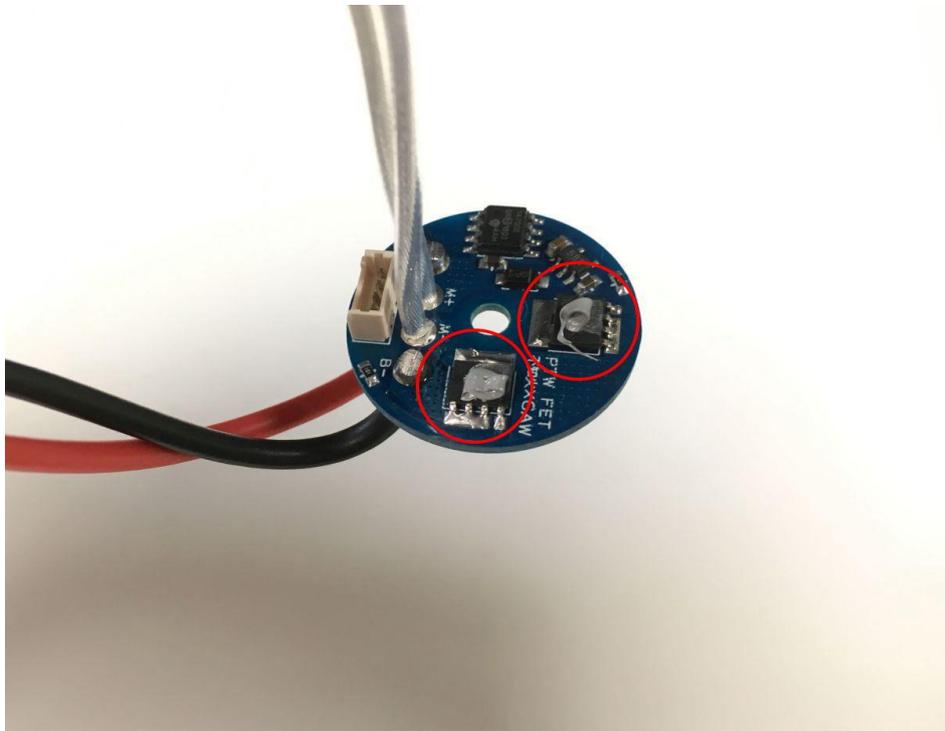
純正FET基板より約22mm全長を短縮でき、  
高性能FETと安定駆動用のドライバ回路を搭載しています。

**対応バッテリー電圧は11.1Vまでとなります。**  
**必ずヒューズを取り付けてください。**



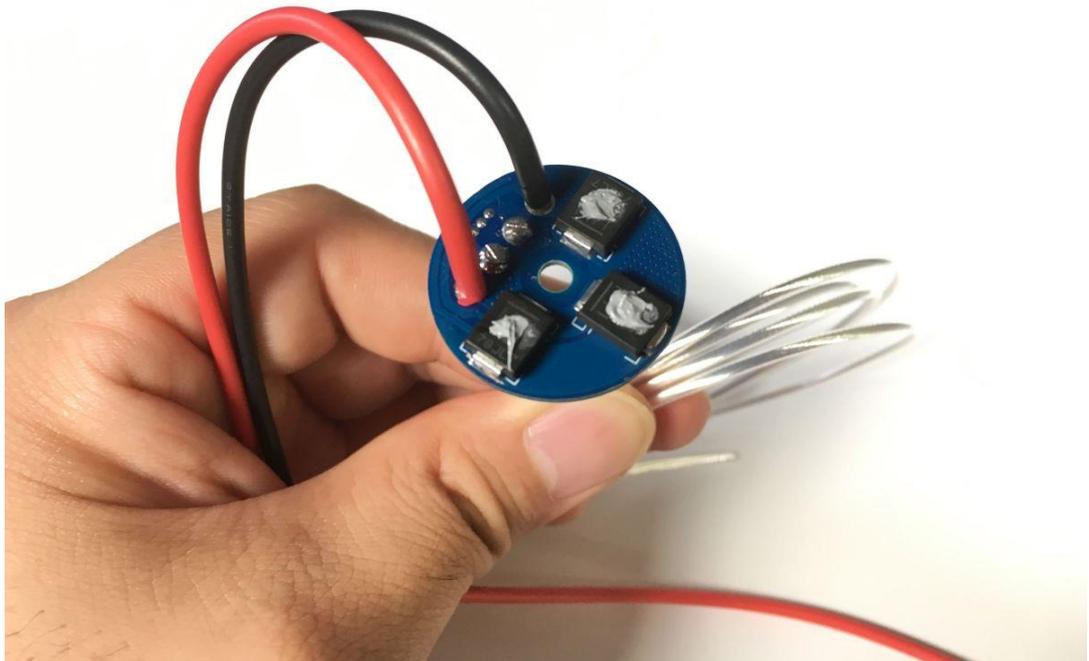
基板にプリントされた位置に従い、付属の配線をはんだ付けします。  
M+がモータープラス側、M-がモーターマイナス側、  
B+がバッテリープラス側、B-がバッテリーマイナス側になります。  
赤黒のシリコンコードはバッテリー用、細くて硬い銀コードはモーター用になります。

基板はスルーホールになっているので、前後どちらにでも配線を向けられます。

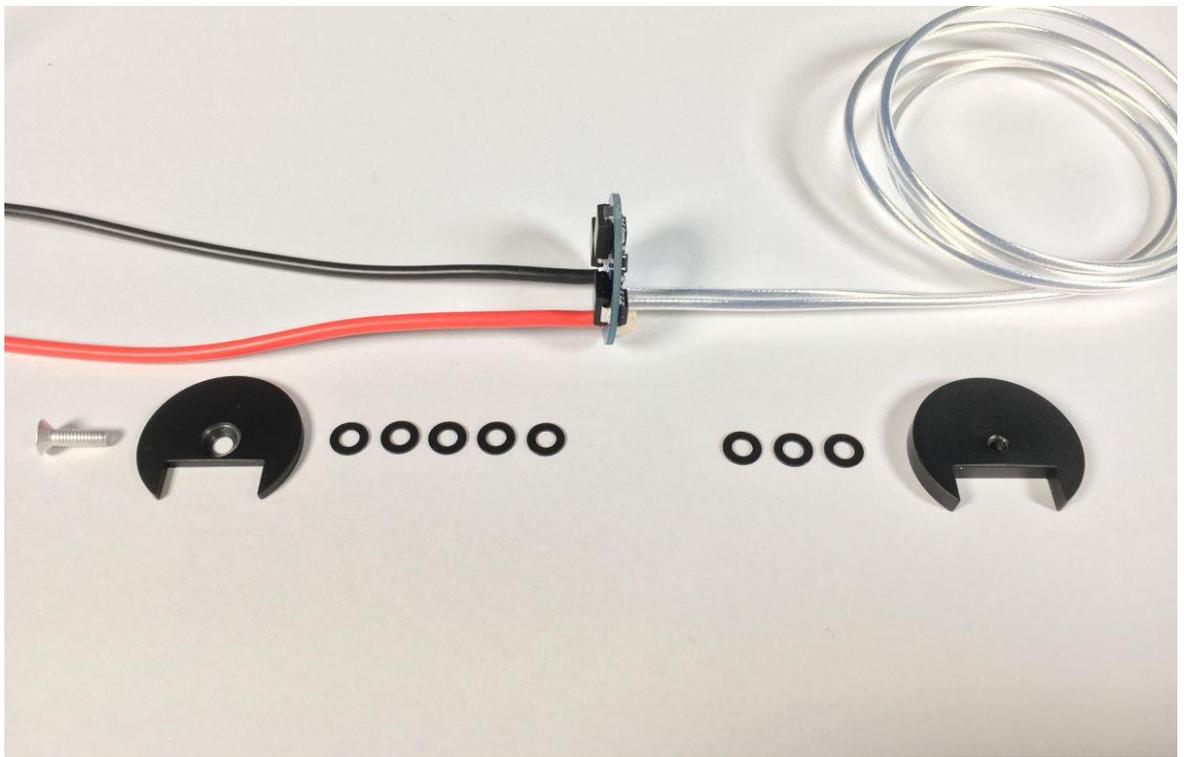


配線をはんだ付けした後、放熱板の取り付け準備に入ります。

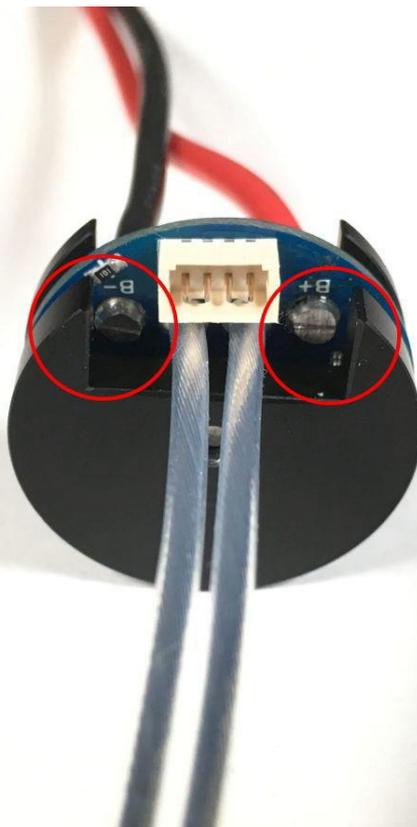
放熱効果を最大限発揮するため、赤丸で囲んだFETの黒いパッケージ部分にCPUグリスを少量塗ります。CPUグリスはパソコン用で結構ですが必ず絶縁性グリスを使用し、絶対に導電性グリスは使用しないでください。



反対側にあるTVS 3個の表面にも塗っておきます。



放熱板を2枚、付属のねじと0.5mmのPOMワッシャーを使って取り付けます。  
POMワッシャーの枚数はストック側が5枚(合計2.5mm)、  
銃口側が3枚(合計1.5mm)となります。

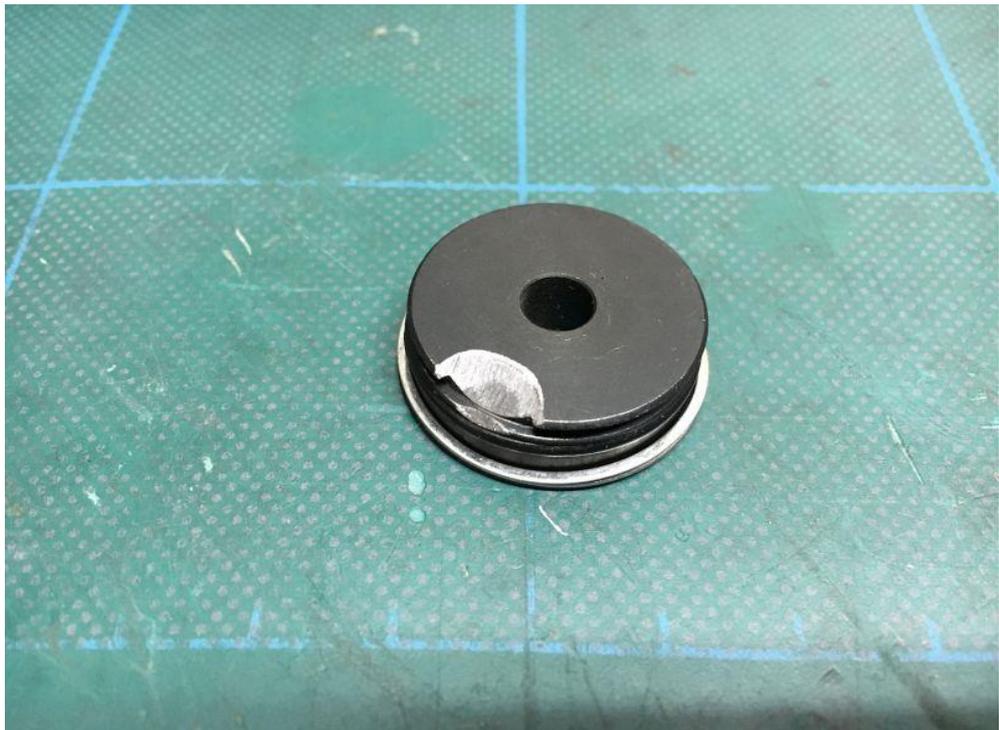


ショートを防ぐため、配線のはんだ付け箇所が  
放熱板に接触していないか入念にチェックしてください。  
はんだ付けした配線が出っ張っている場合はニッパーなどで長さを整えてください。  
不安な場合はホットボンドや固まる放熱シリコンなどを流し込み、  
絶縁固定することをオススメします。



純正の信号線を取り付け、バッファチューブ内に設置します。  
くれぐれも配線を挟み込んで断線させないように注意してください。  
バッファチューブ切り欠き部分の面取りを強くオススメします。

(写真は陽炎5型用円形マイクロFET基板ですが、同じ配置方法となります)



バッファチューブキャップの端っこをやすりやグラインダーで削って  
配線の逃がしをつけてあげると、組み込みがとても楽になり  
断線トラブルを防げます。